



日本生物工学会 100周年に関する理事アンケート

2022年に日本生物工学会は創立100周年を迎えます。100周年を迎えるにあたり、理事会では100周年記念事業準備委員会を組織し、学会の次の100年を見据えた活性化の機会として100周年記念事業を進めることにいたしました。また、準備状況について和文誌に「SBJ100カウントダウン」というコーナーを設置し、会員の皆様に随時報告することにいたしました。最初の企画として、現理事全員を対象に「日本生物工学会の100周年に関する理事アンケート」を実施した結果を掲載いたします。回答には概ねこれまでの執行部の学会運営方針がよく反映されており、学会が積極的に産学官連携や国際化を推進してきたことが窺えると同時に、学会の今後の課題も示されています。内容をご確認いただき、皆様の今後の学会活動を考える機会としていただければ幸いです。

また、会員の皆様にはすでにメールで100周年アンケートを依頼しているところですが、まだお答えでない方は是非ご協力ください。会員アンケートについても、今回と同様に「SBJ100カウントダウン」で報告いたします。

日本生物工学会 100周年記念事業準備委員会

注) 括弧内の数字は同様の回答をされた理事の人数(総数32名)を示しています。

Q1. 生物工学会100年の歴史を総括するとすれば、どのようなものになりますか?大まかなスケッチをお答えください。

A1. 生物学分野の拡大: 醸造学に始まり、発酵工学を経て、生物科学関連の先端技術を積極的に取り込み、日本の生物学・バイオテクノロジーを牽引する中心的な学会に発展した(16名)。

産学官連携の推進: 産学官連携の先駆けとなり、社会実装技術の開発と応用を可能にしてきたことで日本のバイオ産業に寄与し、バイオテクノロジーの産業利用に関わる産学官の会員が活動する影響力の強い学会として発展した(5名)。

100周年の総括: 学会の歴史をレビューし(学会賞、発表演題など、また和文誌、英文誌、国際連携、教育などの部門毎)、学会が果たしてきた貢献を内外に広く発信するとともに、次の100年にむけて学会の進むべき方針を決定して会員で共有すべきである(5名)。

国際化の推進: 関西を起点として、日本全国、アジアへ拡大し、国際的な学会としてのプレゼンスを示すまでに至った(3名)。

独自性の確立: 生物化学工学を中心として工学分野における生物工学の学術的確立へ貢献するなど、生物系学会の中で独自性を保っている学会である(2名)。

Q2. あなたが思う「日本生物工学会の特色、強み、弱み」を自由に述べてください。

A2. <強み>

産業界との連携: 技術指向・実学指向であり、産業界との繋がりが強いため、研究が産に直結する(17名)。

会員間の連携: 学会運営に企業会員や若手会員など多様な人材が参加しており、世代や分野を超えた会員同士の繋がりを強く感じられる(8名)。

学問分野の多様性: バイオ産業に焦点をあてた基礎から応用まで扱える学問的広がり柔軟性を持つ(8名)。

学会の規模: 学会の規模がちょうどよく、小回りの効いた運営ができる(5名)。

学問分野の基盤: 発酵工学・培養工学を中心とした長きにわたる研究業績や社会貢献の歴史がある(5名)。

国際的なプレゼンス: JBBの国際的ステータスが向上し、研究・教育および学会の国際化に貢献している(3名)。



<弱み>

産官学の乖離：経済的合理性の観点での技術評価が欠落している，大学と企業の目指す方向性の交差が少ないなどの要因により，現在，産官からの会員を取り込みきれていない(9名).

学問の体系化：生物工学としての学問分野が体系化されないまま多様化・細分化が進んでおり，研究分野が広く浅くなってきている(7名).

分野間の連携：学会内(研究部会間など)，学会外(学会間など)の交流・連携が不十分である(4名).

支部間のバランス：特定の大学の色が強いいため，他大学や分野の出身者には敷居が高く，支部によっては他の支部に比べ会員が少ない(2名).

学会の差別化：分野が重なる他学会との差別化が十分にできておらず，規模も及んでいない(2名).

真理探究型研究：学理の追求がやや弱い(2名).

大型プロジェクト：学会として大きなプロジェクトを打ち出せていない(1名).

若手研究者支援：若手研究者に対するサポート(表彰機会)が他学会より少ない(1名).

国際的なプレゼンス：特定の地域との連携は見られるが，グローバルな観点でのプレゼンスを示しきれていない(1名).

Q3. 今後の環境の変化の中，日本生物工学会が果たすことができるチャンス(機会)や危惧される要因(脅威)を自由に述べてください.

A3. <チャンス>

産業界への貢献：産学官連携によりSDGs・Society5.0などに代表される社会課題に対し，生物工学的アプローチの有効性を包括的視点で評価し，ベストプラクティスを追求するベースキャンプ，バイオエコノミーの牽引役となる(18名).

異分野融合：企業が異分野融合の橋渡しとして機能し，学会が多様な専門性を持つ研究者の情報共有を促進する醸成するサロンとしての役割を果たす(5名).

情報技術との融合：増え続ける膨大な生命情報を整理活用したAIやIoTなどのデジタル技術との融合研究の展開に期待する(3名).

国際的ステータスの確保：JBBを起点とし，海外の学会との連携，途上国支援などにより国際的ステータスを確保する(3名).

学会活動の充実化：現在盛り上がっている大会のさらなる充実，英文誌，和文誌のオープンアクセス化を進める(2名).

学会の差別化：強みを洗い出し，他学会との差別化を図る(2名).

人材の育成：培養，プラント・エンジニアリング，微生物一般が扱える専門家に対する要望の増加に応じ，バイオ産業で活躍できる博士人材の育成を支援する(2名).

<危惧される要因>

産学官の乖離：学のシーズと産のニーズの乖離，産学官連携の弱体化によりバイオテクノロジー業界が減衰する(8名).

学会の差別化：大きな他学会などとの差別化がはかれず必要性が不明確になる(6名).

会員数の減少：博士課程進学者，会員数の減少が止まらず，学会の統合が進む可能性がある(4名).

国際的ステータスの低下：日本全体の競争力が低下し，アジア諸国の研究レベルの向上に伴って，国際的ステータスが低下する(3名).

教育レベルの低下：若手人材の育成が不十分であったり，学生の発表レベルが低下したりする(2名).

時流への対応：多様化する学問，技術領域の拡大，社会的要請に追従できず魅力が低下する(2名).

研究倫理：倫理的視点を失う(1名).

男女共同参画：現状のまま女性教員が増えない(1名).



Q4. 100周年記念事業として取り組みたいイベントはどのようなものですか？出版，セミナー，賞，その他，自由に述べてください。

A4. 出版：中高理科教師用参考書，生物工学分野の変遷・体系化と将来像，生物工学教育，産学連携，生物工学プロセス設計法，国際連携，100年史，続・生物工学よもやま話，バイオメディア，歴史上の生物工学研究者の伝記，発酵食品の歴史，など，ただし，図書館の飾りにならないような工夫が必要と思われる（15名）。

記念企画：生物工学の果たす役割についての討論会，講演会，座談会などにより，学会発展に資するコンテンツを明確にする（7名）。

一般向け企画：公開講座などの各地での開催，市民向け講演会，公開討論会を開催し，学会活動の広報を行い，将来の研究者に研究の面白さを伝える（6名）。

国際企画：国際シンポジウム，新たな国際会議の設立，留学生を対象とするイベントなどによる，さらなる国際化を推進する（5名）。

学会活動の強化のための企画：技術交流・共同研究のマッチングイベントを行い，支部・部会の活性化や連携，異分野融合を推進する（3名）。

賞の新設：若手に貢献する新賞を設置するなど，インセンティブを充実させる（3名）。

HPの充実化：中高生，大学生，市民に向けた発酵工学・生物工学の紹介や具体的なイメージの提供を行う（3名）。

学会誌での企画：和文誌での特集，英文誌のReviewなどを企画する（2名）。

会員サービス：100周年の年の入会費無料化や連続入会者に対する記念カードの配布（10年：ブロンズ，20年：シルバー，30年：ゴールドなど）を行う（1名）。

Q5. 100周年以降の10年間に生物工学会として継続的に行うと良いと考えられる活動，会員サービスは何だと思えますか？そのために必要な資金の規模についても可能な範囲で記述ください。

A5. 産官学交流支援：会員の情報交換・ネットワークキング，企業説明会場の提供や，産学マッチングの仲介，シンポジウムなどの企画（100万円/年），これらのための資金援助制度や基金（現在400万円の継続）を設立する（8名）。

国際化推進：グローバル化のロードマップを作成，推進するとともに，国際会議を年次開催（100万円/年）する（7名）。

若手研究者支援：若手の産学連携活動の支援や，技術継承のための若手教育，若手会の活性化，若手研究者の国際学会参加旅費の補助（毎年5名程度，100–150万円/年，和文誌にて報告）を行う（6名）。

教育支援：「生物工学基礎講座—バイオよもやま話—」のような実験教本の創刊（会員のみがダウンロードできる実験プロトコル集，50万円/年），生物工学を系統的に学べるWeb授業（会員には無料配信，全10回程度，年一回程度，どこかで集中講義を行っても良い（非会員有料）），基礎教育セミナーなどを企画する（4名）。

支部・研究部会活動の強化：支部活動・研究部会の強化や複数支部と連携した企画（100万円/年）を行う（4名）。

学会賞の新設：若手研究者，女性，海外学会員に対する賞（100万円/年）の新設を行う（2名）。

広報活動：公開講座などを開催し，高校生などへの宣伝を行う（2名）。

異分野融合：会員外（異分野，非研究開発系）の人選を意識した啓発セミナー・大会シンポジウム（100–200万円/年）を開催する（1名）。

学会誌のオープンアクセス化：英文誌・和文誌のオープンアクセス化を進める（1名）。

Q6. 100周年以降，今後の日本生物工学会の進むべき方向性について，自由に意見を述べてください。

A6. バイオテクノロジーの推進：バイオテクノロジーのリーディング学会として着実に活動を継続し，切実な社会課題の解決や豊かな生活文化・価値創造に繋がる技術を追求・発信する（14名）。

国際化：外国人を積極的に取り込み，国際化を図り，アジアでのリーディング学会としてプレゼンスを示し続ける（8名）。

異分野融合：AI，ビッグデータなど情報科学に代表されるような学問の変化に柔軟に対応できるように，他学



会とも協力し、異分野融合、新技術導入、研究者交流の場と機会を提供する(7名).

産学官連携：引き続き産官学が連携して学会を運営し、産からの会員の増加に向けた対策を行う(4名).

女性・若手の活用：女性や若手を積極的に登用、若手会の充実を図り、学会の方向性について議論する(4名).

学会の独自性の明確化：学会発表について研究の専門領域でのグルーピングを生物プロセスの流れの位置づけでグルーピングする方向へ転換する、バイオ戦略2019への方向性への対応の明確化や発信などを通して、学会の独自性を示す(4名).

研究部会の活性化：研究部会の見直しを行う(1名).

会員サービスの充実：入って良かったと思えるように会員サービスを充実させる(1名).

研究費の獲得支援：研究費の獲得を支援できるような企画を立案する(1名).

Q7. 100周年記念事業を準備するために一般会員各位にアンケートを行うつもりです。どのような情報を集めたいですか？自由に述べてください。

A7. 学会への希望・期待：学生会員、留学生、アカデミア、産業界の会員が学会に何を求めているかが知りたい(8名).

100周年記念事業：どのような企画を行えば、記念事業へ参加するか、あるいは、期待しうる出版企画や希望購入価格を聞き、事業に活用する(6名).

学会活動・会員サービス：100周年以降の10年間に継続的に行って欲しい活動・会員サービスについて聞きたい(4名).

バイオテクノロジーの未来：現在のトレンドをどう認識し、10年、20年単位でのマイルストーン技術をどう予想するかを聞き、これらの中で生物工学が注力すべきものを絞り込む(3名).

会員の状況：現在、各会員がやりたいと思っていることとその理由、そのために障害になっていること、その障害をどのように乗り越えようと考えているかを聞き、そのために学会が果たす役割を考える(3名).

大会のあり方：希望する発表形式(口頭、ポスター)や、現在の発表分類の妥当性、学会参加費について聞き大会運営の参考とする(3名).

学会誌：和文誌の電子化に対する意見や英文誌の立ち位置、役割などについて聞く(3名).